

企画者のことば—母児の絆—



もうすぐあの東日本大震災から10年になる。あまりの惨状に心を痛め、当時勤務していた大学病院に日本産科婦人科学会からボランティアの依頼があった際、手挙げして、震災から2週間あまり経った頃、石巻赤十字病院の診療を手伝いに行かせてもらった。病院の周辺は震災の傷跡が色濃く残り、道路はひび割れ、瓦礫がいたるところに積み上げられていた。病院に到着したとき、私が行った頃よりももっと大変な状況下で先陣を切って手伝いに来られていた昭和大学の先生から申し送りを受けた。これまで通っていた産科医院がなくなってしまった妊婦さんたちは、一度水浸しになってゴワゴワになった母子手帳をおずおずと出してこられた。私は、よくぞここまで生きてたどり着かれた、という思いで、ひたすら妊婦健診をし、そして分娩の立ち会いをした。妊婦さんたちにとって、家族や知人を失った悲しみのなかで、お腹の赤ちゃんは希望の源であり、生まれてくる赤ちゃんは新たな明日を生きるためのかけがえのない存在であった。

さて、私が医師になった20年以上前には、胎児超音波を学ぶための教材は、分厚い英文の書籍があるだけであり、あまりよいものがなかった。最近では、日本語の胎児超音波の書籍も増えてきたが、今なお、胎児超音波の習得は簡単ではなく、エキスパートになるには高い壁があるように思う。そこで、この臨時増刊号は、これまでにない、一般の産婦人科医にとって真に役立つ胎児超音波の書籍を作ることを目指して企画した。この本は、発生学の解説があり胎児の形態異常を理論的に理解できるようになっていること、超音波アトラスとして代表的な胎児形態異常の写真を数多く載せていること、そしてQRコードによりWeb上にある100本以上の動画を見ることができること、というように、他の書籍にない特色を多く備えている。このような盛りだくさんの内容にしたため、金原出版の儲けがほとんどなくなってしまう、出版社泣かせである一方で、読者にとってはお買い得な本となった。

この本はたくさんのすばらしい執筆者の先生方のご協力のもとに完成した。執筆者の人選と原稿の依頼にあたって、近畿大学の同門の釣谷充弘先生、胎児発生の専門家である山田重人先生、そして、胎児超音波の第一人者である松岡隆先生に共編集者として助けていただいた。この松岡先生こそが、私が石巻赤十字病院で申し送りを受けた昭和大学の先生である。

この本は、地域の医療機関で診療を行っている産婦人科医が胎児超音波検査を行う際に、大いに助けになるだろう。常に手元において使っていただきたい。

2020年11月吉日

近畿大学医学部産科婦人科学教室

松村謙臣